

# 「リファレンスチェック」

—二稿—

2025/8/2

さいの

〈人物表〉

北沢 寿明

(34)

証券会社に勤めるサラリーマン

代田 由美子

(37)

寿明の婚約者

梅ヶ丘 理人

(34)

寿明の同僚

北沢 毅

(59)

寿明の父

北沢 望

(59)

寿明の母

1. 高級レストラン・個室（夜）

都心の夜景が一望できる個室。

寿明 「ゆっくりでいいよ」

真剣な面持ちの北沢寿明（34）、指輪ケースをパ

カッと開いている。向かいの代田由美子（37）、

涙のあまり嗚咽していて、顔がぐちゃぐちゃ。

由美子、息を整えてから、意を決して、

由美子 「……寿明くんに、言っただけのことある」

寿明 「？」

2. バー・店内・カウンター席（夜）

寿明と同僚・梅ヶ丘理人（34）、並んで座って、

理人 「え、それ気にする？」

寿明 「するだろ。三歳サバ読んでたんだぞ」

理人 「……そんな変わらんか？」

寿明 「いや、そういうことじゃなくてだな」

理人 「可愛い嘘じゃんかよ」

寿明 「それはそれで受け入れたけどさ。謝ってもらったし」

理人 「おう、結婚すんだろ？ 気にすんなよもう」

寿明 「むしろ結婚するからだよ」

理人 「え？」

寿明 「嘘ついてたんだし、信頼関係は作り直さないよ」

カウンター上の寿明のスマホ。待受は笑顔の由美子。

理人 「付き合ってたんくらいだっけ？」

寿明 「半年、ちょっと」

理人 「じゃあさ、今のうちに色々クリアにしとくってのは？」

寿明 「え？」

理人 「そういう調査」

寿明 「いやそういうのは」

理人 「俺はしたよ。借金あった。二百万」

寿明 「……マジ？」

理人 「奨学金だったけどね。ちゃんと返してたし、嫁ちゃんは

借金って自覚も、隠してたつもりも無くてさ」

寿明 「そうなんだ」

理人 「後から何か出てくるよりマシだろ？」  
寿明 「……そんな騙し打ちみたいなこと、したくない」  
理人 「言い方な。リファレンスチェックみたいなものだろ」

### 3. 寿司屋・テーブル席（夜）

回らない高級寿司屋の四人掛けテーブルに、寿明と由美子。向かいには寿明の母・北沢望（59）と父・北沢毅（59）が座っている。

望 「由美子さんも意外と大胆なことするね」

由美子 「お恥ずかしい限りです。本当すみません」

望 「気にしないで。この子このまま結婚しないつもりだと思  
ってたから。あれ、最後に彼女連れてきたのいつだったけ」

寿明 「おい」

望 「ごめんごめん、幼稚園のピアノの先生が最後か」

寿明 「いいってその話も」

望、由美子にビールをお酌する。

由美子 「ありがとうございます」

望 「ウチは同じ年なんだけどさ。高校の同級生」

由美子 「そうなんですな」

望 「年上の方が良いと思うよ。この人言うこと聞かないから」  
毅 「結局言うこと聞かされてます」

三人、笑い合う。

望 「こないいい人いるなんてさ、街コンってすごいんだね」

毅 「由美子さんのご両親ともお会いしたいね」

由美子 「ええ、ぜひ」

毅 「ご実家はどちら」

由美子 「横浜の方です」

寿明 「そうだったけ」

望 「あらオシヤレ。ウチなんか田舎だから」

由美子 「いえ。ぜひ今度お伺いさせていただきます」

### 4. 帰り道（夜）

由美子 「ピアノの先生、どんな人だったの？」

寿明 「そういう話、普通しないよな」

由美子「ねえ、どんな人？」

寿明「覚えてないよ」

由美子「いいじゃん、教えてよ」

寿明、おもむろに立ち止まって、

寿明「由美子の実家ってさ、川崎だよね？」

由美子「え？ 横浜の方だよ」

寿明「でもこの前、川崎で降りたじゃん」

由美子「おじいちゃん横浜の人だし、二駅行ったら横浜市だしさ」と、うそぶく。

寿明「は？」

由美子「え、神奈川県民あるあるでしょ」

寿明「何それ」

由美子「知らないか。神奈川は大体みんな自称湘南か横浜生まれ」

寿明「だったら最初からそう言えば良かったじゃん」

由美子「……なんでそんな突っかかってんの？」

寿明「嘘つくようなとこじゃないだろ」

由美子「嘘じゃないよ。横浜の、方だし」

寿明「そうじゃなくて」

由美子「え、なんかごめん」

## 5. 寿明のマンション・寝室（夜）

寿明、帰ってくるなり洋服を掛けてベッドに座る。

ふと、棚の写真立てが目に入る。

旅行先の寿明と由美子の写真。

スマホに着信。

## 6. 理人のマンション・寝室（夜）

理人、スマホに向かって、

理人「一応リンク送っていたから。俺の紹介ってことになるからさ、マージン入れてくれたら一杯奢るよ」

## 7. 寿明のマンション・寝室（夜）

寿明のスマホ画面には、興信所の結婚調査のページ。その金額に目を見張り、ブラウザを閉じる。

8. 寿明のマンション・寝室（朝）

携帯のバイブ音。寿明、寝ぼけ眼で通話に応じる。

寿明 「……何？ え？」

9. 寿明の実家・リビング（朝）

毅 「母さんには内緒な。浮かれてるから、水差したくないし」

10. 寿明のマンション・寝室（朝）

毅の声 「お節介と思ったけどさ、知り合ってるそんな経ってるわけじゃないし、結婚するって聞いた時に頼んどいたんだよ」

11. 寿明の実家・リビング（朝）

毅、手元には興信所の封筒。

毅 「母さんは気にしてないけどさ、サバ読んでたのだからって簡単にそうですかって話じゃないだろ？」

12. 寿明のマンション・寝室（朝）

毅の声 「俺は中見てないし、やめろって言ってんじゃないからな。同じものそっちに送ったから、ゆっくり考えてから……」

寿明、電話を切り、携帯の電源を切る。  
一つ息を吐いて、布団をかぶり、再び眠りに着く。

13. 寿明のマンション・寝室（夜）

インターホンの音。  
寿明、目覚めて、急いでベッドを出る。

14. 寿明のマンション・リビング（夜）

寿明、インターホンのカメラを確認すると、配達員。

15. 寿明のマンション・玄関（夜）

寝ぼけ眼でドアを開けると配達員。  
配達員 「速達です」  
寿明、荷物を受け取りサインするが、興信所の封筒

であることに気づいて、固まる。

寿明 「……やっぱり、いません」

と、封筒を押し返す。

配達員 「え？ もう受け取っちゃったんで……」

寿明 「いりませんから。送り返してください」

と、配達員と押し問答。寿明、無理やりドアを閉め

ようとしたところに由美子登場。

寿明、驚く。由美子、封筒を見て、取り上げる。

寿明 「ちょっと」

## 16. 寿明のマンション・リビング（夜）

由美子 「昨日怒ってたよね」

寿明 「別にいいよ」

由美子 「昨日はさ、お母さんが優しくかったからホッとしちゃって、  
本当に嘘ついてるつもりとかななくて」

寿明 「いいって」

由美子 「でも、そう見えるよね。ごめん、立場分かってなかった」

寿明 「分かったから」

由美子 「歳のこと、やっぱりまだ気にしてるよね」

寿明 「してないって」

由美子 「気にはしてるでしょ。許してくれただけでさ」  
腰掛ける二人。テーブルの上には封筒。

由美子 「……見ないの？」

寿明 「見ないよ」

由美子 「見てもらった方が正直私は楽」

寿明 「え？」

由美子 「そういう意味じゃなくて。その、それで気が晴れるなら」  
寿明 「こんなことするもんじゃない」

由美子 「別にいいよ。寿明くんだってモヤモヤしてるでしょ？」

寿明、封筒を手に取って、

寿明 「俺にまだ言っていないこと、ある？」

由美子 「ない、と思う」

由美子、じっと寿明を見ている。

寿明、ふと思いついて、

寿明 「例えば、奨学金借りてたりする？」

由美子、意外なことを聞かれたという顔で、  
由美子 「……うん。百万くらい残ってるかな」

寿明も少し驚いて、

寿明 「そう、なんだ」

由美子 「なんで今聞いたの？」

寿明 「今は、それで十分」

と、封筒を丸めて、灰皿に乗せ、火にかける。

(おわり)